

移り変わる街並み

時代の流れの中で、人々の暮らしとともに街並みも変わってきました。のどかな農業地帯が、計画的に整備された副都心を中心とする住宅地へ、昭和30年代ころから急速に移り変わった厚別の姿を見てみましょう。

農業王国の面影



(上) 厚別中央1条7丁目(現厚別老人福祉センター付近)に広がる水田(昭和44年)(右)現在の厚別公園付近のデントコーン畑(昭和49年ころ)



(厚別区域)		昭和35年	平成2年	平成12年
農家数	専業	351	54	20
	兼業	196	108	36
	総数	547	162	56
経営耕地面積(単位 a)	田	69,769	4,490	1,212
	畑	64,671	12,712	9,643
	樹園地	—	50	160
	総数	134,440	17,252	11,015

(資料 昭和36・平成2・15年版札幌市統計書)

明治十六年に長野県出身者が、JR厚別駅付近に入植して、厚別の開拓の歴史は始まりました。当時は、小高い所は森林とクマイザサでおおわれた密林帯、低い所はヨシが一面に生え、その中にアカダモ(ハルニレ)やハンノキなどが生い茂る湿地帯だったといわれています。その後、各地区で入植と開墾が進み、田畑や牧草地が広がる農業地帯として発展していきました。昭和二十五年七月に、厚別区域を含む白石村が札幌市と合併。昭和三十三年には、人口の急増に伴う住宅不足の解消策として、大規模住宅団地の造成が始まりました。これが転機となり、次々と田畑や牧草地が住宅地などに変わりました。

副都心の歩み

昭和四十七年に策定された副都心開発基本計画に基づき、都心の商業・業務機能の役割を分担する副都心として、ふさわしい整備が進められてきました。



昭和49年10月、国鉄(現JR)千歳線の短絡化に伴い、新札幌駅が開業。翌年から、商業施設の建設など副都心としての整備が始まりました(昭和48年)



青葉町5丁目から見た副都心地区。中央部の道路が現南郷通、中央右の森が現区役所付近、中央左の森が現サンピアザ付近(昭和38年)

